

～多文化の大人も子どもも、その多様性を活かして豊かに暮らせる環境づくり～ 大学生と外国ルーツの若者の協働による発信をデザイン

あそび舎てんきりん 芳賀洋子

<目的>

外国出身者が日本社会の一員として自分らしく活躍できる社会は、以下の2つが両輪となって初めて実現する。
1)当事者の日本語を学習する環境を作ること、および、2)地域の社会環境が、多文化共生、多様性を尊重する社会になること。地域で活動していると、2)の視点が欠けている現状を痛感することが多い。にほんご畑では、「おんなじってうれしい！ちがうってたのしい！」を合言葉に、参加するすべての人が対等に学び合える場を目指している。そして、その先に、多文化共生社会の実現があると考えている。
今回は、外国出身者と同じ地域に暮らす隣人として、共に街を作っていこうとする意識を広めていくために、にほんご畑での学び合いを一步前進させ、大学生や多文化の若い世代が協働して企画・発信することで、すべての人が気づきの機会を持ち、さらに、周りに変化を生み出すことを期待した。

<取組の内容と経過>

あそび舎てんきりん・にほんご畑(毎週木曜日 10:00～11:30 現在は ZOOM)

にほんご畑スタッフ4人 外国ルーツの仲間(Sさん、Kさん) 大学生6人 日本語学習者 その他の仲間

力のある大学生が、単にボランティア体験をするだけではもったいない。にほんご畑に参加して気づいたことなどを発信してみることを提案。失敗はあり得ないが、仮に途中で投げ出しても私たちが引き受けるので、楽しくやってほしいと伝えた。学生と多文化の若者チームが結成され、勉強会の企画・発信につながった。

◆準備期間

7月に大学生の参加開始。にほんご畑で外国ルーツの参加者・学習者と対話型の学習、日本人スタッフとのミーティング、勉強会への参加等を経験する中で、こちらがから、大学生主体で何かをやってはどうかと提案。大学生+Sさん(スリランカ出身)+Kさん(フィリピン出身)のグループができ、勉強会を企画・発信することになった。その後、目的の確認やプログラムの内容検討、役割分担などについてミーティングを重ね、12月18日に実施。



- 【内容】1)多言語ゲーム
- 2)座談会(SさんとKさんの体験から)
- 3)大学生から(にほんご畑に参加して)
- 4)多言語文字体験(シンハラ語)
- 5)グループワーク
- 6)やさしい日本語ラップ

参加者 33 名

令和3年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業地域日本語教育実践プログラム
＜主催＞地球っ子クラブ2000
＜後援＞埼玉県教育委員会

外国ルーツの子ども達が力を伸ばすための 多様な豊かな教育環境づくり

勉強会
多様な出会いと対話から
生まれる学びと変容
～おんなじって嬉しい！ちがうって楽しい！～

12月18日(土) 9:00～12:00(質疑応答含む)

定員 40人
会場 さいたま市文化センター
多目的ホール
(南浦和駅から徒歩7分)

大学生と外国ルーツの若い
世代が協働して発信します！
是非、ご参加ください！

この講演会・勉強会では、ろう教育の
から多様性の豊かさや日本語教育の
あり方を考えていきました。
今回は、若い世代からの発信を受けて、
新しい時代の多様性や人々との関わり
のあり方、地域を作る地域日本語教室の役割
を考え、私たち一人ひとりが変わって
いっていきたくて発信したいと思っています。
どんな発信やパフォーマンスになるのか、
ワクワクドキドキしながら楽しみに
しています。(コーディネーター 芳賀洋子)

＜次回予告＞勉強会(ZOOM)
日時:2022年2月20日(日)9:00～12:00

問い合わせ・申込先
芳賀(はが) tabunka.coconico@gmail.com

<取組の成果>

大学生チームは、多文化共生や、多様性や、やさしい日本語について学び、日本語支援とは何かを考え直し、若者らしい発信をした。それぞれが楽しんで生き生きと輝き、その後の活動を模索し始めていることは何よりもうれしい発展である。また、勉強会の参加者も、若者の発信を新鮮に受け止めた。こうしたみんなで作り上げた実践を通して、多文化共生を自分のこととして考える人たちが増えることが、外国人市民の暮らしやすさに繋がるものと思う。

◆参加者の感想～振り返りの会とアンケートから～

振り返りの会①

にほんご畑(12/23)

振り返りの会②

勉強会参加者のおしゃべり会(1/5)

振り返りの会③

東洋大学ゼミ(1/19)

- ・たくさん話すうちに、いろいろやってみたいことができた。料理、音楽、カフェ…継続的がいい。(全員)
- ・勉強会を通して、日本語の壁を作らないことでみんなでわくわく会話ができると感じた。(学M)
- ・みんなの前で話すことで自分はこういうことで悩んでいたんだなあと認識。自分が成長した実感があつた(S)
- ・地球っ子クラブって、褒め合ってプラスの世界。そこから個性や良さが育つと思った。(K)
- ・自分たちが主催するという、貴重な体験だった。完璧じゃなかったけど、かえってよかったと思える。(学D)
- ・「助けてあげたい！」と思った一人です。Sさん、Kさんの話を聞き、その力強さを見て、日本語とか日本の習慣のしつけでは、二人のように両方の国を好きになれないと気づいた。(学K)
- ・ぶっつけ本番が意外と成り立った。にぎやかで楽しかった。(学N)
- ・他団体では学習者との繋がりが無い。にほんご畑で話して、相手のことを知る大切さがわかった(学K)
- ・初級の人と話すのは難しかったが自分の工夫で伝わった時はうれしかった。やさしい日本語が大切(学M)
- ・今まで、人前で話すのは苦手リーダーをやったことはなかったし、いつも受け身な行動をしていた気がする。でも、いろいろな方との出会いで新しいことに挑戦してみようと思えて、それが形になった瞬間だったからとても嬉しかった。まずやってみることで、自分がこんなに変わるのかとびっくりするくらい！(学A)

S市O図書館多言語交流会(10/25)

◆発展とこれからの展望

おしゃべり会

みんなの
サードプレイス

多文化カフェ
Sさん、Kさん

大学生と
高校生の
交流会

あいぱれっとおはなし会
コロナのため中止
チャレンジスクール

<コーディネーターとして>

◆実践を通して「行ったこと」「考えたこと」の変遷。

勉強会当日の前には正直不安があった。自分ですることなら予想がつくが、任せた相手がどこまでやってくれるかに確証は持てない。しかし、信じてよかった。コーディネーターとしての苦しさ、信じる力の大切さを実感した。みんなのいいところを引き出し活躍する舞台を創るという仕事ができたと感謝したい。

◆今回の課題解決に向けた実践を通じて、地域日本語教育コーディネーターとして果たした役割。

- ・にほんご畑において、学習者、外国出身の仲間、大学生、日本語ボランティア等の参加者が、教える／教えられる関係でない対等の人間関係が築けるように、対話型プログラムを実施。(7月～)
- ・大学生チームへの働きかけ。勉強会に取り組むことになってからは、ミーティングを重ね、当事者の体験談を交え、にほんご畑での気づきについて大学生らしい発信をしていこうというところを確認。できるだけ、若者に任せた。
- ・広報用チラシの作成、広報、募集、参加者の受け付け、会場押さえと会場との打ち合わせ、当日の受付やコロナ対策等の裏方は、地球っ子グループの協力のもと、すべて担当した。
- ・事後の振り返りの会を開き、意見交換と共に、今後どんなことができるか、話し合いを深めた。
- ・大学生と高校生の交流会を実現し、高校生と大学生が繋がった。(1/27。第2回目を開くことで、合意。)
- ・大学生チームのミーティングでは、前向きな話し合いになるよう楽しい雰囲気を演出。今後への夢が膨らんだ。
- ・困難を抱えた外国人を助けるボランティアだと思ってきた人も多いが、外国出身者へのレスペクトが生まれた。

◆地域日本語教育コーディネーターとして自身が大切にしたい視点。

おんなじってうれしい！ちがうってたのしい！多文化共生・多様性を楽しめる社会づくり

今日本にいる子どもたちはみんなこれからの日本社会を共に生きる子どもたち

周りには素敵な人がいっぱいいる。それぞれの良さをひきだし、活躍の舞台を生み出していく。そのためにも、いろんな人(アート、大学、地域の市民団体など、日本語と一見関わりない分野)とつながって、自分自身が多様性のある人間になること。自分から積極的に仕掛ける力はないので、実現したい夢をたくさん持ってスタンバイしておく。一緒に実現してくれる能力のある人は必ず現れる。そのチャンスでは、すぐ行動する。

◆実践において、難しいと感じたこと、今後に向け知りたいこと。

多文化共生の環境づくりのためには、行政、学校との連携と理念の共有が不可欠である。文化庁の委嘱事業の運営委員である教育委員会等とは一定の良好な関係は築けており様々な相談は来るが、協働して取り組むという姿勢はない。地域日本語教育コーディネーターの研修をどう活かしていけるのか、楽しみでもあり課題でもある。